九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

現代日本語の客体結果相とヴォイス

副島, 健作
九州大学大学院比較社会文化学府

https://doi.org/10.15017/4494429

出版情報：比較社会文化研究. 1, pp.35-44, 1997-03. Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

『比較社会文化研究』第1号（1997）35～44頁
Social and Cultural Studies
No.1（1997），pp.35～44

現代日本語の客体結果相とヴォイス

副　島　健　作

Abstract: In the *shitearu* construction, there still remains the questions 1) to what extent we can interpret it as 'passive voice', which possess properties of (i) marking in morphology, (ii) decreasing a valence in syntax and (iii) focusing on the patient instead of the agent in semantics, and 2) what grammatical category it belongs to. The purpose of this paper is to provide a satisfactory answer to these problems.

The syntactic and semantic characteristics of the *NP-ga shitearu* construction overlap those of passive voice. On the other hand, although the *NP-wo shitearu* construction can occur with an overt agent without promotion, it decreases a valence in terms of 1) demoting of the agent-subject to the status of an optional term and 2) promoting the patient-object marked by the accusative case to the status of subject in grammatical relations, marked by the same *-wo* case, which can be regarded as a sign of ergativity. Both the *NP-ga* and *NP-wo* constructions, consequently, are similar to passive voice and can be said to be an expression of 'objective resultaive' like voice. Moreover, the fact is noteworthy that objective resultative is expressed by passive voice in English and Russian, thus indicating a high correlation between objective resultative and passive voice.

0．序

現代日本語の動詞の，形態論的カテゴリーとしてのアスペクト形式として認められているものには，スル，シテイル，シツツアル[1]等があります。同様に，これまでに数多くの研究者が，シテアルの形式をも，日本語のアスペクトの問題に関連づけて考察をしてきました。確かに，シテアルという形式は，意志的行為の結果としてもたらされる状態をあらわす表現，すなわち，結果相をあらわす表現であり，動詞の表す動作の何らかの流れの姿を表しているという点でアスペクト形式であります。アスペクト形式であるからには，何らかの動詞の形と対立しての形であって，スル－シテイル，スル－シツツアルと同様に，やはりスルの形式に対しての結果相であると考えらますが，

(1)　窓ガ開ケテアル。

の文に対立するスルの形式の文は，

(2)　誰カガ窓ヲ開ケル。

であって，決して，「＊窓ガ開ケル」ではなく，純粋に，他のアスペクト形式のように動詞の形式のみの対立，単語レベルとしてスルと対立しているとは言い難いのであります。上の例では，シテアルの形式をとる構文は，対格（ヲ格）で表されている目的語「窓ヲ」が，主格（ガ格）「窓ガ」をとって主語に昇格し，主語「誰カガ」は削除されています。このように，動詞のシテアルの形式は，文の統語構造にまで影響を及ぼす形式なのであり，スルとは文レベルにおいて対立し，ヴォイス性を有していて，単にアスペクトの問題だけでは解決できない形式なのであります。

1．シテアルを述語にする文はこれまでどのように研究されてきたか

シテアル構文のヴォイス性は，鈴木重幸の1972『日本語文法・形態論』で，〈（はたらきかけた結果を対象にのこすような意志的な）うごきがおわってしまって，そのうごきの結果がのこっていること〉を表すという意味記述とともに，直接対象のうけみとにたところがあり，たちば的な面をもっている，と説明してあります。

ところが，シテアルには，(1)のように目的語がガ格をとらずに，ヲ格をとる文も存在します。

(3)　窓ヲ開ケテアル。

こうした構文は，スルの構文「窓ヲ開ケル」との対立においては，動詞の形のみの語レベルでの対立でしかなく，ヴォイス的な面を持っているとは到底いえません。したがって，シテアルの構文は，受け身文と同じメカニズムでは説明がつかないということになります。高橋太郎の1969『すがたともくろみ』では，こうした事実を確認しながらも，それを以下のような場合に限定し，やはり，シテアルの構文を受け身文的に扱かってあって，〈対象に変化を生ずる

うごきがおわったあと，その対象を主語にして，結果の状態を述語としてあらわしたもの〉と規定してあります。

(4) a. 聖書はなかなか味の深いことをかいてある。

［うごきの間接対象の変化した状態］

b．そのふろは，ちいさい西洋風の油槽を人造石でしつらえてあった。

［うごきの主体でも対象でもないものの題目語化，あるいは規定化］

c．そこは，例のつけとどけを十分にたっぷりきかしてあるので

［準備のできた状態］

（高橋1969）

しかし，a，bの文のヲ格がガ格で表されても容認できるということが，これらの条件がヲ格シテアル構文とは直接関係していないことを示しています。cの「準備のできた状態」の意味は，高橋が新たに認めたシテアルの意味です。シテアルの構文が，意志的な動作をあらわす動詞にかぎられることから，当然，そういうニュアンスは出てくることが考えられますが，私の考えによれば，シテアルの準備性の意味は，動詞自体の持つ語彙的性格やコンテクストの影響によるものであって，シテアルの形式自体の意味ではないでしょう。ところが，高橋は，「まえもって」「すでに」などという副詞をおぎなっても意味がかわらないことから，シテアル形式の意味として，この準備性を認めました。こういう副詞が使えるかどうかが，すでに，コンテクストに依存している，と私は考えるのですが。

このように，シテアルの意味の１つとして準備性を認めようとする，高橋の考え方は，おおくの問題点をかかえていたにもかかわらず，吉川武時の1973『現代日本語のアスペクトの研究』にうけつがれます。吉川は，高橋とはちがって，シテアルを受け身文的に扱うことからはなれながらも，その準備性の意味を認めて，この形の意味を次の5つに分類します。

① 対象の位置が変化した結果の状態をあらわす。

② 対象が変化した結果の状態をあらわす。

③ 動作がおわったことをあらわす。

④ 放任をあらわす。

⑤ 準備のためにした動作をあらわす。

ここで，吉川は，⑤の準備性を②，③の意味からの派生であるとして，その派生条件に，語い的条件，構文的条件，その他，の３つの条件を認めて，はからずも，準備性がシテアルの形式自体の意味ではないことを，確認してしまいました。

また，森田良行の1977『基礎日本語』では，意味の違いを構文の違いに求め，ガ格シテアル構文は行為の結果の現存，ヲ格シテアル構文は，結果の蓄積，という意味とともに，前もって準備，を表すと考えて，準備性をヲ格シテアル構文に結び付けていますが，

(5) 論文作成ノタメ，タクサン資料ガ集メテアル。

のようなガ格シテアル構文であっても，「論文作成ノタメ」というコンテクスト的要素のために準備の意味を含み得ることから，やはり，準備性とヲ格シテアル構文とははっきりした関連はないと思われます。とはいえ，意味の違いを構文の違いに見い出そうとした森田の試みは，その後の研究者に大きな影響を与えて，この2つの構文をどう記述するかに研究の焦点が移ってきます。

こうして，ヲ格シテアル構文のために，シテアル構文を受け身文的に捉えることに矛盾が生じてきたわけですが，井上和子の1976『変形文法と日本語』では，この問題を，主語が不特定の名詞句で，これが消去された場合にだけ，受け身文と同じメカニズムが働く，と説明しています。ここでは，(3)のような構文は，

(6) 太郎ハ窓ヲ開ケテアル。

の「太郎ハ」のように，ある特定の名詞句の主語が顕現してはじめて文として捉えられていますが，ヲ格をとるシテアル構文が，かならずしも主語を顕現しなくてもよいことは，(3)の例が容認可能なことからもあきらかです。安藤貞雄の1986『英語の論理・日本語の論理』でも，シテアルの構文を，「行為者＋目的語＋他動詞」の構造から派生される，と，受け身文的に捉えています。安藤は，主語の顕現には言及せず，行為の対象物が目的語として意識されれば「ヲ」が選ばれる，と説明していますが，ヲ格が対格として認められているとすれば，それは当然のことと言えるでしょう。

これらの考え方に対して，益岡隆志の1987『命題の文法』では，ガ格シテアル構文は受動者指向性が，ヲ格シテアル構文は行為指向性が強い，とまとめて，受け身文的な解釈からは離れています。益岡は，被動作主を表す名詞句の格が，その抽象度があがるにつれてヲ格をとる傾向にあり，その場合、被動作主が抽象的であるがゆえに，シテアル形式の表している《結果的な状態》の主体に置かれる視点の比重が，被動作主よりも行為へと向けられる，ということを述べているのです。

(7) a．業平は自分が写した経巻類をまだ相当量各地の寺々に預けてあり，…。

b．七，八人っていっても，ベストメンバーを選んであるんだぜ。

c．笠井は，これまでに，チョコレートに入れて，金の指輪や，ネックレス，ブレスレットなどを，彼女に贈ってある。

d．それで，京都府警に鑑定をたのんであるの。

（益岡1987）

さらに，益岡は，ヲ格シテアル構文を，ヲ格がガ格に置き換えられるかどうかで２つに下位分類し，置き換えられないほうが，より，行為指向性が強いとしています。(7)の例のａ，ｂに比べると，ｃ，ｄの例のほうが，被動作主を表している名詞句がより抽象的であり，ガ格で表すのには抵抗があります。しかし，動作の結果，残っているものが，具体的な《対象のあたらしい状態》ではなく，抽象的な《効力》であっても，焦点は動作主ではなく，被動作主にあることを見逃してはならないでしょう。ｃで，「彼女に贈った」動作の効力が，基準時（ａ～ｄでは現在）に関与している主体は，「金の指輪や，ネックレスやブレスレッドなど」であり，ｄでは，「京都府警にたのんだ」動作の効力が，基準時に関与している主体は，「鑑定」なのであります。動作の効力の基準時に関与している主体が，動作主であるなら，ｃ，ｄの例は次のように表されるでありましょう。

(8) c′. 笠井ハ，コレマデニ，チョコレートニ入レテ，金ノ指輪ヤ，ネックレス，ブレスレットナドヲ，彼女ニ贈ッテイル。

d′. ソレデ，京都府警ニ鑑定ヲタノンデイルノ。

こうして，動作の効力が残っていることを示すヲ格シテアル構文も，ガ格シテアル構文と同様，被動作主に焦点が向けられているという点で受け身的である，ということがいえるのです。それにもかかわらず，益岡は，この類の文型の行為指向性のみに執着するあまり，被動作主を表す名詞句が必須項であり，動作主を表す名詞句がオプショナルであるという事実を忘れてしまって，ヲ格シテアル構文は，特定の動作主が主語の位置を占める，能動型，の構文であるとしています。

以上の議論をまとめれば，シテアルをめぐっての研究の問題点は，アスペクトの文法カテゴリーの問題に関連づけて考察されてきたにもかかわらず，形式の対立の中において考えることがなかったということにあったといえるでしょう。よって，シテアルが，スルとは文全体の統語構造にまでかかわって対立していることが見落とされて，さらには，ヲ格シテアル構文を受け身文的に解釈することの困難から，シテアル構文を受け身ヴォイスのメカニズムで解釈するか否かで，２つの考え方が対立しているのです。そして，シテアルをヴォイスをあらわす形式のひとつだとしない考え方が，今日では多数であります。しかし，そうすることの問題点については，すでに述べたとおりです。したがって，本稿では，シテアル構文をヴォイス的に解釈することの，考え方の正しさを明らかにするとともに，動詞のシテアルの形式が動詞の文法カテゴリーとしてどこに属する形式であるのかということについて，少しでも納得のいく解答を提示すべく議論を進めてみたいと思います。

2．ガ格シテアル構文

ガ格をとるシテアル構文が，意味的にも統語的にも，日本語のいわゆる直接対象の受け身文と類似していることはよく知られている事実であります。例えば，次の例の能動文と受け身文とを比較すれば明らかなように，受け身文では被動作主（Ｐ[(2)]）が主格で起こります。

(9) a．太郎ガ花子ヲ殴ッタ。

b．花子ガ太郎ニ殴ラレタ。

この状況はまさにガ格シテアル構文における格の分布に相当するものです。そこでここでは，その共通性について論じてみたいと思います。

2.1. ガ格シテアル構文のヴォイスと受け身性

そのためには，まず，受け身文の性格を正しく把握しなければなりません。村木（1991:174）によると，受け身文は，1)形態的なものとして，動詞が特別な形態をとる（日本語：サレル）。2)統語的なものとして，能動文に比べ結合価の減少をともなう，つまり，Ｐが必須項として主格をとり，動作主（Ａ）は斜格（日本語：ニ格あるいはニヨッテを後接）をとってオプショナルな要素となる。3)意味的なものとして，Ｐに視点がおかれる，と言う特性をもっています。

これに比べてガ格シテアル構文はどういった特性を示すのでしょう。

(10) a．影の隣りに糸織かとも思われる，女の晴衣が衣紋竹につるしかけてある。（『野分』）

b．妻ガ影ノ隣リニ糸織カトモ思ワレル，女ノ晴衣ヲ衣紋竹ニツルシカケル。

(11) a．きょうは一椀のめしと和えもの，干魚がちまちまとそなえてある。（『歳月』）

b．キョウハ女ガ一椀ノメシト和エモノ，干魚ヲチマチマトソナエル。

(12) a．古い油の染みたリボンが其の中に捨ててあった。（『蒲団』）

b．芳子ガ古イ油ノ染ミタリボンヲ其ノ中ニ捨テタ。

(13) a．そのまん中に丸い黒い星座早見が青いアスパラガスの葉で飾ってありました。（『銀河鉄道の夜』）

b．先生ガソノマン中ニ丸イ黒イ星座早見ヲ青イアスパラガスノ葉デ飾ッタ。

まず，動詞の形態でありますが，「ツルシカケル」「ソナエル」「捨テタ」「飾ッタ」がサレルという形式ではないにしろ，それぞれ，「つるしかけてある」「そなえてある」「捨ててある」「飾ってある」という特別な形をとります。次に，統語的に，Ｐが主格に昇格し，Ａである「妻ガ」「女

ガ」「芳子ガ」「先生ガ」は削除されます。２項述語文から１項述語文へとなっているのです。意味的にみて，Ｐに視点が置かれている，動詞の表す動作の結果生じた状態を表している主体はガ格の形をしているＰである，というのは言うまでもないでしょう。このように，ガ格シテアル構文は受け身文の特性と全く一致した特性を備えているのであります。

2.2. ガ格シテアル構文における動作主

日本語の受け身文との大きな違いとしては，Ａが決して立ちえないということでありましょう。

⑽′ ａ．＊影ノ隣リニ糸織カトモ思ワレル，女ノ晴衣ガ妻ニヨッテ衣紋竹ニツルシカケテアル。

ｂ．影ノ隣リニ糸織カトモ思ワレル，女ノ晴衣ガ妻ニヨッテ衣紋竹ニツルシカケラレテイル。

⑾′ ａ．＊キョウハ一椀ノメシト和エモノ，干魚ガ女ニヨッテチマチマトソナエテアル。

ｂ．キョウハ一椀ノメシト和エモノ，干魚ガ女ニヨッテチマチマトソナエラレテイル。

⑿′ ａ．＊古イ油ノ染ミタリボンガ芳子ニヨッテ其ノ中ニ捨テテアッタ。

ｂ．古イ油ノ染ミタリボンガ芳子ニヨッテ其ノ中ニ捨テラレテイタ。

⒀′ ａ．＊ソノマン中ニ丸イ黒イ星座早見ガ先生ニヨッテ青イアスパラガスノ葉デ飾ッテアッタ。

ｂ．ソノマン中ニ丸イ黒イ星座早見ガ先生ニヨッテ青イアスパラガスノ葉デ飾ラレテイタ。

このように，受け身文では，Ａがオプショナルな項で，あってもなくてもいいのに対して，ガ格シテアル構文においては，必ず表層には現われないという特徴があります。しかし，こうした差があるにせよ，受け身文一般の統語的特徴である結合価の減少が行われるという点では共通しています。

さらに付け加えるなら，日本語はそうではないでしょうが，英語その他のヨーロッパ諸言語や，世界の言語のいくつかの受け身文の特徴として，普通，他動詞文でないと受け身文を取らないという特性があります。その特性にシテアルの構文は当てはまって，日本語のほとんどの自動詞にはシテアルという形式は存在しない[3]のであります。

こうして，ガ格シテアル構文を受け身文の特性と照らしあわせて見ると，意味的，統語的に，そして，特別の形態をとる（有標形式である）という意味では形態的にも，かなりの共通性を見せるのです。そこで，この構文を，受け身型と呼ぶことにします。

3．ヲ格シテアル構文

しかし，シテアル構文を受け身文の類種として，ヴォイス的に捉えることについて，ここでやっかいなのがヲ格をとるシテアルの構文です。これらは，一見すると，スルをとる文とはその動詞の形でのみ対立していて，文の統語機能にまでは影響をおよぼしません。

⒁ ａ．上段にはメロスの愛神の模像を，ほの暗き室の隅に夢かとばかり据えてある。（『野分』）

ｂ．上段ニハ主人ガメロスノ愛神ノ模像ヲ，ホノ暗キ室ノ隅ニ夢カトバカリ据エル。

⒂ ａ．僕は飛行機の予約をしてあるのだ。（『ダンス・ダンス・ダンス』）

ｂ．僕ハ飛行機ノ予約ヲスルノダ。

⒃ ａ．たまたま引戸をあけてあったために，その右の窓のむこうに白刃がきらめくのを見ることができた。（『歳月』）

ｂ．誰カガタマタマ引戸ヲアケタタメニ，ソノ右ノ窓ノムコウニ白刃ガキラメクノヲ見ルコトガデキタ。

⒄ ａ．自分は，美術学校にはいりたかったのですが，父は，前から自分を高等学校にいれて，末は官吏にするつもりで，自分にもそれを言い渡してあったので，口答え一つ出来ないたちの自分は，ぼんやりそれに従ったのでした。（『人間失格』）

ｂ．……，父ハ，前カラ自分ヲ高等学校ニイレテ，末ハ官吏ニスルツモリデ，自分ニモソレヲ言イ渡シタノデ，……。

これらは，動詞の形態がスルの形からシテアルの形に変わっても，対格をとるＰがそのまま対格で表示されますし，⒂，⒄に至っては，Ａもそのままの形，位置で顕現しています。前節でみた，結合価の減少という受け身文の統語的特徴を満たしていないのです。このことが，シテアルの形式をヴォイスとして捉えることの妨げとなっています。

3.1. ヲ格シテアル構文のヴォイスと能格性

ところが，意味について考えてみますと，⒁で「据える」動作の結果が継続しているのは「メロスの愛神の模像」であり，⒂で「する」動作の効力が継続しているのは「飛行機の予約」であり，⒃で「あける」動作の結果が継続しているのは「引戸」，⒄で「言い渡す」動作の効力が継続しているのは「それ」で指示されている内容であるというように，シテアルの形式で表される動作の結果の，あるいは効力の継続主体は，ヲ格で表されているＰであります。つまり，意味的には，視点はＰに置いてあって，その点では，受け身型と何ら違いはないのです。意味的には，受け身文

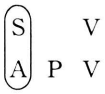
の特徴を満たしているのです。

このことは，実は統語的にも反映しています。上の⒁，⒃の例をみるとわかるように，Aが顕現しなくてもこの構文は存在し得ます。Aは必須項ではないのです。必須項でないものに，その文の主たる視点，焦点が置かれるはずがありません。また，Aがオプショナルであるということは，つまり，ヲ格シテアル構文も，ガ格をとるものと同様，結合価の減少を起こしているということになります。こうして，このヲ格をとる構文も，やはり，単一必須項をとる1項述語文であり，その視点は，ヲ格をとるPに置かれる，と言えて，ヴォイス的に扱うことが正当化されるのです。

日本語においては，自動詞文などの1項述語文は，その単一項においてガ格をマークするのが普通です。1項述語文の単一項（S）を，2項述語文のPを除外してAと同一に取り扱う状況を対格性といいます。日本語は対格性の体系をもつ言語です。しかし，これまでみてきたように，ヲ格シテアル構文を1項述語文として解釈するなら，その単一項Sはヲ格をマークしていて，その場合，Sを，Aを除外してPと同一に取り扱う現象，能格性と広く一般に言われている現象と一致します。1項述語文であっても，単一項にヲ格を取り得ることを，こうした能格性の概念を用いて説明することができるでしょう。

柴谷（1986:76）は，対格性，能格性のパターンを次のように示しています。

a．対格パターン



（典型的にはS＝A＝0で，Pが対格表示を受け，一般的に前者を主格(NOM)，そして後者を対格(ACC)と呼ぶ。）

b．能格パターン

（典型的にはS＝P＝0で，Aが能格表示を受け，一般的には前者を絶対格(ABS)，そして後者を能格(ERG)と呼ぶ。）

これらのパターンの典型的な例を，能格性言語トンガ語と対格性言語日本語においてみてみましょう。

⒅ a．Na'e tamete'i 'a Koliate
（過） 死ぬ （絶） ゴリアテ
ゴリアテが死んだ。
（主）

b．Na'e tamate'i 'e Tevita
（過） 殺す （能） ダビデ
'a Koliate
（絶）ゴリアテ
ダビデがゴリアテを殺した。
（主） （対）

（Siewierska1984:22）

このように，能格性の体系においては，1項述語文の主語に相当する名詞句S（⒅aのKoliate「ゴリアテ」）と2項述語文の目的語に相当する名詞句P（⒅bのKoliate「ゴリアテ」）が同じ絶対格として起こり，2項述語文の主語に相当する名詞句A（⒅bのTevita「ダビデ」）が他の独立した格，能格により表示されるのです。ここでは，このSとPのグルーピングは格標示においてのみなされていますが，もちろん，能格性という概念は，格標示のみにとどまらず，動詞の呼応一致や等位構文での名詞句の省略の起こり方など，その他の文法形式全般に対して広げられた概念であります。

こういった能格性と全く同様の現象が，ヲ格シテアル構文にもみられるのです。ここでは，格標示に関してのみの現象にとどまってはいますが。

⒆ a．芳子ガ 紺絣ノ書生羽織！白イ木綿ノ長イ紐ヲ 買イマスヨ。

格標示	（主）		（対）
文法関係	（主語）	（目的語）	（述語）
意味役割	（動作主）	（被動作主）	

b．紺絣の書生羽織！白い木綿の長い紐を 買ってありますよ。

格標示	（対）	
文法関係	（主語）	（述語）
意味役割	（被動作主）	

（『蒲団』）

ここで，シテアル構文のSは，2項述語文のPと同じ対格をマークしています。⒅でみたトンガ語の例同様，S＝Pで同じヲ格を標示しているのです。また，前にも述べたように，このシテアル構文のヲ格は，動詞の表す動作の結果生じた状態の主体，つまり，文法関係における主語として機能しています。したがって，ここでは，ヲ格を対格と呼ぶのはふさわしくないのかもわかりません。このように，SがPと同じヲ格で標示され，格標示の点ではまさに能格的である，と思われることから，この構文を能格型と呼ぶことにします。

3.2. ヲ格シテアル構文における動作主

普通，文法関係における主語の機能を有する名詞句は，主格をとります。日本語なら，ガ格です。したがって，シテアル構文のSはガ格をとり得ます。また，普通，意味役割における被動作主の機能を有する名詞句は，対格をとります。日本語ならヲ格です。したがって，シテアル構文のSは，ヲ格もとり得ます。格標示とは，いってみればあいまいなものであり，シテアル構文に関していえば，文法関係を重視するか，意味役割を重視するかで，そのSはガ格をとったりヲ格をとったりするのでしょう。

そしてこのことは，動作主をその構文に許容できるか否かということで，統語的にも関わっていると思われます。動作主は普通，主格をとります。日本語ではガ格を。動作

主というのはもちろん意味役割です。文法関係ではありません。その証拠に，文が受け身文化しても動作主が動作主であることに変わりはありません。そして，シテアル構文においては，文法関係において格標示をしている，つまり，主語を（被動作主であるにもかかわらず）すでにガ格で標示している受け身型には，ガ格がダブるのを避けるために，動作主は現われ得ないのです。主格以外の形でも現われ得ないのは，すでに前節において検討しました。それだけ，この受け身型のシテアル構文が動作主を排除する傾向が強いということでしょう。

ところが，一方，意味役割において格を標示している，つまり，被動作主を（主語であるにもかかわらず）ヲ格で標示している能格型においては，すでに述べたように，動作主は顕在化可能なのです。文法関係的には主語の機能をもつSを，意味役割を重視してヲ格でマークすることによって，動作主も意味役割的にガ格でマークすることが可能となり，シテアル構文に顕在化させることが可能になるというメカニズムなのでしょう。ほかならぬここに，Sを敢えてヲ格でマークする能格型の存在意義があると私は思います。

(20) 「藩士」としての体裁だけはととのえるために桂は伊藤を自分の手付ということにしてあった。
（『歳月』）

(21) 大久保はすでに，自分を補佐させるべき陸海軍の実力者に対し，それぞれ現地への出発を命じてある。
（『歳月』）

ところが，上の２つの例と，前述の(15)，(17)の例をみると，いずれも，動作主はガ格ではなく，題目語化した，「名詞句＋は」の形で現われています。これらをガ格で表すと，

(15)′ ？僕ガ飛行機ノ予約ヲシテアルノダ。

(17)′ ？……，父ガ，前カラ自分ヲ高等学校ニイレテ，末ハ官吏ニスルツモリデ，自分ニモソレヲ言イ渡シテアッタノデ，……。

(20)′ ？「藩士」トシテノ体裁ダケハトトノエルタメニ桂ガ伊藤ヲ自分ノ手付トイウコトニシテアッタ。

(21)′ ？大久保ガスデニ，自分ヲ補佐サセルベキ陸海軍ノ実力者ニ対シ，ソレゾレ現地ヘノ出発ヲ命ジテアル。

というように，何となく不自然な文になってしまいます。この事実は，能格型であっても，動作主をガ格そのままで表すことは，やはり，避けられる傾向にあり，題目語化するという，遠回しの，いわば格外的な，それでいてガ格を表すのに最も似ている手法でもってしか，シテアル構文には動作主を顕在化させられないことを示しているのでありましょう。そして，シテアルの形式が，受け身文のようにAを降格させるだけでなく，むしろ，表層に表すことすらも避けるほどに徹底して，Pに視点を置くということがわかるのであります。

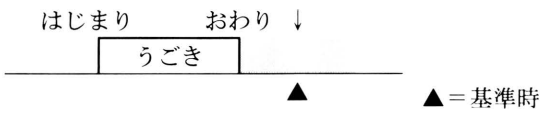
こうして，ヲ格シテアル構文は，1)Aを顕現することはするが，オプショナルであり，顕在化した場合でもガ格ではなく題目語化しているという点で，スルの形式に対して結合価の減少を起している，また，2)Sはヲ格をマークするが，文法関係においては主語であって，能格性でもって考えれば，SがPと同じ格標示をマークするのは何らおかしいことではない，というこの２点から考えて，やはり，受け身的なヴォイス構文と位置付けなければならないでしょう。そして，シテアル構文は，Sが，ガ格，ヲ格のどちらをマークするかに関わらず，〈意志的な動作の結果生じた被動作主＝客体の状態〉を表す《客体結果相》である，と明言できるのです。

4．英語，ロシア語との対照

以上述べてきたように，シテアルという形式自体は客体結果相を表すわけでありますが，世界の言語においては，結果相の意味が受け身文においてのみ可能であるという例も少なくありません[4]。そう考えると，シテアルという形式が受け身の特徴を併せもつということも，何ら特別なことではないのです。英語やロシア語の例から，客体結果相と受け身が深く相関していることを考察し，シテアル形式を受け身と同じメカニズムで捉えることの正当性をみていくことにしましょう。

シテアル構文は，何度も述べているように，Sの表すもの，つまり意味役割における被動作主＝客体への求心的な動きが終わったあとにできあがる，結果の，静的な特徴を捉えて，話題の時点＝基準時にさしだしています。これを簡単に図にかいて示すと以下のようになりましょう。

(21)



英語やロシア語において，これと同じような意味を表す文法カテゴリーは，アスペクトというよりは，むしろ受け身ヴォイスにおいてです。受け身の形式が表す１用法として，この，客体結果相が存在するのです。

4.1. 英語の客体結果相

英語の場合，受け身の形式は，BE＋V-enです。普通，この形は，客体への求心的な動きを，ひとまとまりのものとして，基準時に，動的な特徴としての動きとしてさしだされています。

(22) a．Mr. Smith was killed by a car.
（スミス氏は車に殺された。）

b．The strawberries have been eaten by the

birds.

（そのイチゴは小鳥に食べられてしまっている。）

これらの例は，それぞれ基準時（aでは過去時，bでは現在ペルフェクト時）において，客体に視点を置いての，動的な特徴としての動作そのものをさしだしています。

ところが，同じ形式で，動作の結果の継続している状態を表すこともあります。

(23) a．My bags are packed.

（私のかばんは荷造りしてある。）

b．It was already broken.

（それはすでにこわしてあった。）

これらの例は，それぞれ基準時（最初の例では現在時，次の例では過去時）において，動作の結果生じた客体の静的な状態をさしだしていて，(22)のように動詞の表す動作を動的な動きとしてさしだしている受け身とは区別されます。このように，その表している意味がシテアル形式と著しく類似しているこの形式は，一般に，状態性の受け身STATAL PASSIVEといわれています。

また，英語には，これとは別に，以前の動作と基準時との何らかの関係づけをさしだすペルフェクト（完了）というカテゴリーが存在します。ペルフェクトの形式は，HAVE+V-enです。そして，受け身の形式がペルフェクト形式をとると，やはり，動作の結果生じた客体の状態をあらわすのです。

(24) a．My bags have been packed.

（私のかばんは荷造りされている。）

b．It's been broken.

（それはこわされている。）

ここでは，基準時（どちらも現在）に，それ以前に起こった出来事を関連づけてさしだしていて，やはり，動作の結果，あるいは効力の，基準時においての継続状態をあらわしています。(23)と(24)とが，形式においては受け身とペルフェクト＋受け身とで違っていながら，意味的にはほぼ同じことを表していることが，このことを物語っているでしょう。しかし，〈ふたつの時間的平面，すなわち先行の平面と後続の平面とが意味において両立しており，しかもこの2つの平面に属する2つの状況の間にあれやこれやの連関が存在するような動詞の形（Маслов（1984:117））〉であるペルフェクトの形式は，受け身形式をとらない場合，視点は被動作主ではなく，むしろ動作主に置かれるでしょう。したがって，文法カテゴリーとしてシテアル形式に対応する形式は，状態の受け身です。

それは，文法的な性格において，かなりの類似をみせることからもいえることです。状態の受け身の文法的な性格を，渡辺（1992:44）は，

状態のうけ身を述語にもっている文には，うごきの主体の表現（前置詞byをともなう間接対象語）も，うごきそのものの様態や時間の表現も参加することができない。また，完了形は，うごきそのものの時間と結果の局面の時間との両方をふくみこむ時間の表現をともなうことができるのだが，状態のうけ身には，それができない。

とまとめています。例えば，

(25) a．In 1972, the Democrats were defeated.

（1972年に，民主党が打ち負かされた。（受け身）
1972年に，民主党が打ち負かしてあった。
（状態の受け身））

b．In 1972, the Democrats were defeated by the Republicans.

（1972年に，民主党が共和党に打ち負かされた。（受け身））

（Quirk.et al.1972）

で，まず，動作主が顕在化すると，それは動的な受け身の意味しか表しません。つまり，状態の受け身は，動作主の顕現を許さないのです。このことは，シテアル構文にも共通していて，既に述べたように，シテアルの場合，客体をヲ格で表すことで動作主を顕在化する方法もあるのですが，基本的には，動作主は顕現不可能であります。

次に，時間の表現‘in 1972’が，状態の受け身の解釈ですと，動作そのものの時間をさすのではなく，動作の結果生じた客体の状態の存在している時間をさしています。日本語の場合も同じことがいえて，上の日本語のシテアルを述語にする文の例で，時間の表現「1972年に」は，「打ち負かす」動作の結果生じた「民主党」の状態が存在している時間をさしているのです。ただし，日本語のシテアルの場合，時間の表現が，以前の動作そのものの時間をさす場合もあります。

(26) 1972年ニ，民主党ガ打チ負カシテアル。

この場合，時間の表現「1972年ニ」は，民主党を打ち負かす，という事実があった時間をさすのか，1972年以前にその事実が存在して，民主党が打ち負かされた状態にある時間をさすのか，あいまいなのです。

こうしてみてくると，シテアル構文は，動作主を顕在化することができる，また，時間の表現が以前の動作そのものの時間をさすことも可能であるということから，英語の状態の受け身ほど徹底して，以前の動作そのものとその結果生じた客体の状態との関連を切り離してはいないということがいえるのですが，基本的には，どちらも客体結果相の意味を表しているのです。

4.2. ロシア語の客体結果相

ロシア語の場合も同様に，受け身の形式が客体結果相を

表します。ロシア語の受け身ヴォイスは，被動形動詞過去の短語尾とбыть[6]によって構成されます[7]。被動形動詞の短語尾というのは，動詞（普通は完了体の他動詞）過去語幹[8]＋-н，-тの形式です。そして，この形式には，a)状態的意味と，b)動作的意味があります。

(27) a．Вчера выставка *была*
昨日　展覧会が(主)　be(過)
открыта только утром.[10]
開く(被形過[9])だけ　朝
（昨日展覧会は朝のうちだけ開いてあった。(状態)）

b．Наконец, только вчера
ついに　ようやく　昨日
выставка *была* *открыта*.
展覧会が(主)　be(過)　開く(被形過)
（ついに昨日展覧会は開かれた。(動作)）

(28) a．Дом *построен*
家が(主)　建てる(被形過)
из кирпича.
レンガで
（家はレンガで建ててある。(状態)）

b．Дом *построен*
家が(主)　建てる(被形過)
в прошлом году.
去年に
（家は去年建てられている。(動作)）

(29) a．Когда мы вернёмся, стол
とき　私が　帰る　食事が(主)
будет *накрыт*.
be(未)　用意する(被形過)
（私が帰ったときには，食事が用意してある。(状態)）

b．Следующее совещание *будет*
次の　会議が(主)　be(未)
созвано в ноябре.
召集する(被形過)　11月に
（次の会議は11月に召集される。(動作)）

(27)は過去，(28)は現在，(29)は未来のテンスにおける受け身ヴォイスです。このように，ロシア語の受け身においても，英語と同様，状態の受け身が存在し，その表している状態は，やはり同様に，動作の結果生じた客体の状態であります。したがって，時間の表現も，動きそのものの時ではなく，動作の結果生じた客体の状態が存在している時をさします。例えば，(27)において，同じ‘вчера’でも，動作の受け身のbでは，昨日というその時にちょうど展覧会が開かれ始めたことを含意していますが，一方，状態の受け身のaでは，昨日という時は，単に，展覧会が朝だけ開かれ，それが終わった状態にある時点をさしています。また，(29)aでも，‘когда мы вернёмся’は，それ以前に食事が用意されるという動作があり，その結果として食卓に料理がある時点をさしているのです。

こうして，状態の受け身は，動詞の表す動作の結果生じた客体の状態を基準時にさしだし，動作の受け身は，客体への求心的な動きを，ひとまとまりのものとして，基準時に，動的な特徴をそのまま動きとしてさしだしているように思えます。

ただし，現在テンスの場合，動作の受け身は，動作そのものをとらえてはいますが，その動作は基準時（ここでは現在）にさしだされているものではありません。(28)bの場合，現在時には，すでに家は建っていて，その結果あるいは効力が発話時に現存していることを表しています。だから，ここでは，この動作の受け身の形は，以前に起こった動作と基準時（ここでは現在）との関連，つまり，ペルフェクト性を表しているのです。これは，動作をそのまま，テンス形式の表している基準時にさしだしている，過去テンスや未来テンスの動作の受け身とは区別しなければならないでしょう。そして，以前の動作の後の局面を問題にしているという点では，むしろ，状態の受け身に共通しているといえます。したがって，このペルフェクト的受け身を状態の受け身の一種と私は考えたいと思います。

状態の受け身とこのペルフェクト的受け身との違いは，動作そのものの時間，様態を，副詞語句によって表せるということでしょう。(28)bの‘в прошлом году’は，建物が建てられたその時点をさしています。このペルフェクト的受け身を状態の受け身の一種と考えるなら，ロシア語は日本語同様，客体結果相の形式であっても，以前の動作そのものの時間をも，時間の表現によってさしだすことができるということになって，英語との違いがみられるのです。

さて，ロシア語の受け身ヴォイスでも，動作主は降格してオプショナルなものとなりますが，顕現不可能というわけではありません。そして，状態の受け身においても，それが可能なようです。

(30) Эта книга *куплена* **им**.
この　本が(主)　買う(被形過)　彼に(造)
（この本は彼に買われている。）

前述したように，客体結果相の形式では，英語の場合，動作主は顕現不可能であり，日本語の場合，ほとんど不可能で，被動作主がヲ格をとる場合にかぎって，しかも「名詞句＋は」という題目語化の形をとる場合という条件つきで可能でありましたが，ロシア語の場合，上の例のように，動作の受け身と同じ造格によって動作主を示すことができ

るようであります。

このように，ロシア語の状態の受け身は，以前の動作そのものを時間の表現で表すことができ，場合によっては動作主を顕現させることができる，という点で，英語の状態の受け身よりも，日本語のシテアル構文に近づいています。

4.3. 客体結果相が受け身形式で表される理由

以上，英語，ロシア語においては，客体結果相を，受け身ヴォイスによって実現しているということをみてきました。これらの，意味的に，受け身，客体結果相，ペルフェクトの受け身，を表す文法形式を，簡単に表にして示せば以下のようになるでしょう。

意味	受け身	客体結果相	ペルフェクト受け身
日本語	サレル	シテアル	サレテイル
英語	BE+V-en		HAVE BEEN+V-en
ロシア語	БЫТЬ+V-н/-т		

(11)

このように，英語，ロシア語においては，意味的に受け身を表す文法形式と，意味的に客体結果相を表す文法形式とが，分化されていないわけですが，ここで，なぜ，動作の結果生じた客体の状態を表すのに受け身の形式が必要なのか，考えなくてはならないでしょう。Shibatani(1985)は，受け身の特性は動作主を非焦点化することである，と述べています。それはつまり，統語的に言えば，動作主を削除（あるいはオプショナルなものに）して，動作主に焦点を置かせなくすることを意味しますが，意味役割的には，動作主を排除しているわけではありません。むしろ，それがたとえ不特定であっても，なんらかの動作主の存在をほのめかすためには，動作主を非焦点化させる以外他に方法がなく，そうすることによって逆に，意味においては動作主が存在していたということを示しているのです。客体結果相は，文字どおり，動作の結果生じた客体の状態をさしだしています。したがって，以前の動作は絶えずつきまとい，その動作主も必ず存在し，それを何らかの形で表現あるいはほのめかす必要があるでしょう。

そしてそれが，英語，ロシア語においては，動作主の非焦点化，つまり，受け身ヴォイスだったのです。日本語のシテアルの場合，シテアルをとる動詞が意志的なものに限られるというのも，動作主の存在をその動詞の語彙的特性によってほのめかそうとする表れでしょう。そして，シテアル構文自体も，客体結果相に必要な動作主の存在のほのめかしという機能を，すでにみてきたようなかたちで動作主を非焦点化させることによって実現しているのです。

要するに，受け身と客体結果相とは，動作主の非焦点化によって，つまり，ヴォイスを変えることによって，動作主の存在をほのめかそうとしているところに共通点があるといえましょう。そう考えると，シテアル構文を受け身的なヴォイスとして捉えることがますます正当性を帯びてくるのです。

5．結

以上みてきたことを総括すると，シテアルの構文は，スルとの対立において考えると，その統語的特徴はまさに受け身文そのものであるということがいえるでしょう。動詞がその形をとることによって，能動文の目的語であるPが主語へと昇格し，主語であったAが降格されてしまうという，文の活用をも起こさせる形式シテアルは，やはり，単にアスペクトの文法カテゴリーだけには収まらない形式であり，ヴォイスのカテゴリーとも絡み合った，非常に興味深い，いわば，アスペクト＝ヴォイス形式であるということがいえるのです。

そして，客体結果相と受け身文との間に密接な関係があることは，英語やロシア語などにおいては，客体結果相の意味が受け身文においてのみ可能であるという例が示していて，シテアルという客体結果相形式が受け身的なヴォイスの特徴を併せもつことも，何ら不思議なことではないのです。今後，この構文は，アスペクト，ヴォイス両方の観点からアプローチしていく必要があるのであります。

註

（1）シツツアルに関しては，形態論的なカテゴリーとしてのアスペクト形式とはっきり言及している研究はみあたらないが，そのさしだしている意味＝《進行》，ほとんどの動詞にみられる＝文法的である，といった観点などから，アスペクトを表す文法形式として認めたい。

（2）本稿で用いた略字は下記の通りである。A「２項述語動作主」，被形過「ロシア語動詞の被動形動詞過去の形」，過／現／未「動詞の過去／現在／未来形」，能「能格」，P「２項述語被動作主」，S「１項述語単一項」，主「主格」，対「対格」，絶「絶対格」，造「造格」。

（3）自動詞であっても，シテアルの形をとる例がまれにみられる。「いやっていうほど眠ってあるから，二，三日徹夜しても大丈夫だ」「大事な試合を控えているので，十分休養してある」「二，三回泳いであれば，心臓麻痺の心配はなかろう」(以上，森田1977:51)。

（4）Comlie（1976:134-138）参照。

（5）特に断らない限り，英文の例はPalmar（1969）。

（6）現在はゼロ，過去はбыл（男）／-о（中）／-а（女）／-и（複），未来はбыть の現在変化形（人称による）をつける。

（7）不完了体の場合，接尾辞-ся をつけて-ся 動詞（再帰動詞）化することによって，受け身ヴォイスにあたる意味を示す。例えば，Дом *строится*（длотником）.（家は（大工によって）建てられている。（現在））／Дом *строился*.（家は建て

られていた。(過去)) ／Дом *будет строиться*.(家は建てられていくだろう。(未来))。ただし，不活動体名詞が主語となり，3人称においては用いられるが，その他の場合には避けられるという制限がある。城田(1993: 361)参照。

(8) 動詞の過去形から，-л(男)／-ло(中)／-лa(女)／-ли(複)を除いたもの。

(9) ここでは，被動形動詞過去の短語尾をさす。以下，被形過＝被動形動詞過去の短語尾。

(10) 以下，ロシア語の例は城田(1993)。

(11) この表の，ロシア語の中のV-н／-тは被動形動詞過去の短語尾を示す。

参考文献

Anderson, L. 1982. 'The "perfect" as a universal and as a language-particular category'. In Hopper, P.J.(ed.). *Tense-aspect: between semantics and pragmatics*. Amsterdam: John Benjamins. Pp.227-64.

安藤貞雄. 1983.『英語教師の文法研究』大修館.

———. 1986.『英語の論理・日本語の論理』大修館.

Comrie, B. 1976. *Aspect: an introduction to the study of verbal aspect and related problems*. 山田小枝(訳). 1988.『アスペクト』むぎ書房.

———. 1981. 'Aspect and voice: some reflexions on perfect and passive'. In Tedeschi, Ph./Zaenen, A.(eds.). *Tense and aspect. Syntax and Semantics 14*. New York: Academic Press. Pp.65-78.

———. 1988. 'Passive and voice'. In Shibatani 1988: pp.9-23.

井上和子. 1976.『変形文法と日本語』大修館.

Jacobsen, W.M. 1992. *The transitive structure of events in Japanese*. Tokyo: Kuroshio Publishers.

Jespersen, O. 1924. *The philosophy of grammar*. 半田一郎(訳). 1958.『文法の原理』岩波書店.

Joos, M. 1964. *The English verb: form and meanings*. Madison and Milwaukee: University of Wisconsin Press.

金田一春彦(編). 1976.『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房.

木下浩利. 1991.『英語の動詞 — 形とこころ —』九州大学出版会.

Knjazev, J.P. 1988. 'Resultative, passive and perfect in Russian'. In Nedjalkov 1988: pp.343-68.

工藤真由美. 1989.「現代日本語のパーフェクトをめぐって」言語学研究会(編)『ことばの科学3』むぎ書房. Pp.53-118.

Маслов, Ю, С. 1962. 'Об основных понятиях аспектологии'. 菅野裕臣(訳). 1991.「アスペクト論の基本概念について」『動詞アスペクトについて(Ⅱ)・学習院大学東洋文化研究所調査研究報告』35: pp.98-139.

益岡隆志. 1987.『命題の文法』くろしお出版.

松本克己. 1986.「能格性に関する若干の普遍特性 — シンポジウム『能格性をめぐって』を締めくくるために —」『言語研究』90: pp.169-90.

宮原文夫. 1969.「過去完了形の機能 — 田桐・中田，両氏の所論にふれて —」『英語青年』115: pp.357-60.

森田良行. 1977.『基礎日本語』角川書店.

村木新次郎. 1991.『日本語動詞の諸相』ひつじ書房.

Nedjalkov, V.P.(ed.) 1988. *Typology of resultative constructions*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

———. and Jaxontov, S.Je. 1988. 'The typology of resultative constructions'. In Nedjalkov 1988: pp.3-62.

奥田靖雄. 1988.「時間の表現」『教育国語』94: pp.2-17, 95: pp.28-41.

Palmer, F.R. 1965. *A linguistic sturdy of the English verb*. 安藤貞雄(訳). 1972.『英語動詞の言語学的研究』大修館.

———. 1974. *The English verb*. London: Longman.

———. 1994. *Grammatical roles and relations*. Cambridge: Cambridge University Press.

Quirk, R.et al. 1985. *A comprehensive grammar of the English language*. London: Longman.

Shibatani, M. 1985. 'Passive and related constructions: a prototype analysis'. *Language* 61: pp.821-48.

———.(ed.) 1988. *Passive and voice*. Amsterdam and Philadelphia: Benjamins.

柴谷方良. 1986.「能格性をめぐる諸問題」『言語研究』90: pp.75-96.

城田俊. 1993.『現代ロシア語文法』東洋書店.

Siewierska, A. 1984. *The passive: a comparative linguistic analysis*. London: Croom Helm.

———. 1988. 'The passive in Slavic'. In Shibatani 1988: pp.243-89.

鈴木重幸. 1972.『日本語文法形態論』むぎ書房.

高橋太郎. 1969.「すがたともくろみ」金田一1985: pp.117-53.

角田太作. 1986.「能格言語と対格言語におけるトピック性」『言語研究』90: pp.149-68.

Unbegaum, B.O. 1957. *Russian grammar*. Oxford: Clarendon Press.

渡辺慎晤. 1992.「いわゆる状態の受け身STATAL PASSIVEの意味について — 態・滞在・配置・所有 —」言語学研究会(編)『ことばの科学5』むぎ書房. Pp.41-72

Холодович, А.А. 1979. 'Глагол в современно японском языке: 7. перфект-результатив'. 菅野裕臣(訳). 1991.「現代日本語の動詞：7. ペルフェクト＝結果相」『動詞アスペクトについて(Ⅱ)・学習院大学東洋文化研究所調査研究報告』35: pp.140-55.

山田小枝. 1984.『アスペクト論』三修社.

吉川武時. 1973.「現代日本語のアスペクトの研究」金田一1985: pp.155-327.